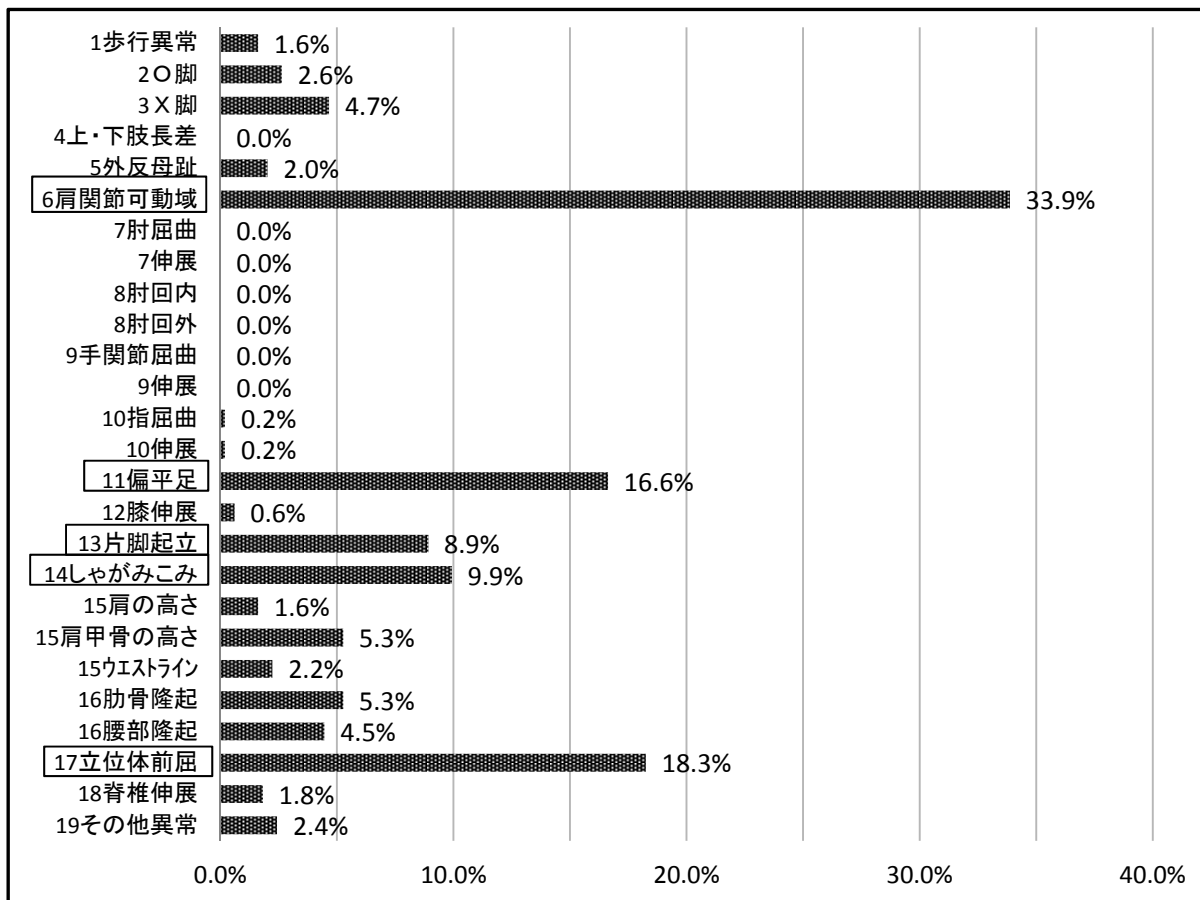


四肢の状態（運動器）の診断結果における有症者の割合

（有症：経過観察[B]，要医療機関受診[C]）

※モデル校 5 校 小学校 3 年生 493 名



今回のモデル校での調査結果から、肩関節の可動域や立位体前屈等の項目において、課題のある児童の割合が高い傾向があることが推測され、児童の筋肉及び関節の固さや身体の不均等なバランス等を予防することが学校生活を送る上で必要であると考えられる。

これらの調査結果を踏まえ、課題改善については、体育の授業との連携はもとより、家庭と連携した取組も図ることが課題改善につながると考え、仙台市医師会の協力を得ながらアクションプログラム5にある補強運動の資料を作成した。

モデル校5校 小学校3年生

C: 要医療機関受診の割合

学 校	割合 (%)
J 小学校	14.0
K 小学校	6.4
L 小学校	23.3
M 小学校	3.2
N 小学校	2.4
計	9.5%

モデル校 5 校の調査結果を平均したところ、約 1 割の児童が要医療機関の受診が適当とされる。

運動習慣の定着化を図りながら、体力・運動能力と同様に運動器の機能の改善及び向上が必要とされる結果となり、授業等での意図的な取組が求められる。

平均して、約1割の児童が
要医療機関の受診を勧告され